



荒川ふるさと 文化館だより

荒川区教育委員会
荒川ふるさと文化館
荒川区南千住6-63-1
TEL 03(3807)9234
登録(30)0056号

開館20周年 平成10年（一九九八）5月1日に荒川ふるさと文化館は開館しました。開館以来20年。通史を常設展示で紹介し、区の歴史や文化に関する数多くの企画展・館蔵資料展を毎年開催してきました。平成10年に「幕末の三筆展－貫名海屋を中心として－」を開催して以降、「あらかわと職人の歴史世界」「彰義隊とあらかわの幕末」「橋本左内と小塙原の仕置場」「奥の細道・旅立ち展」をはじめ、東京球場、千住製絨所、隅田川、富士山、千住大橋、小松崎茂、都電、号外、遺跡、煉瓦、大名屋敷等をテーマに企画展を開催し、多くの方々にご来館いただきました。

文化財としての伝統工芸技術 また、文化財保護の拠点として、文化財の登録・指定、保存修理、埋蔵文化財の発掘、講演会・講座、刊行物の発行・映像の制作等の普及事業を行ってきました。荒川区の文化財の特徴として、無形文化財・工芸技術の占める割合の多さが挙げられます。現在、区内には、41人の登録無形文化財（工芸技術）の保持者（内、15人は指定）が居住しています。大切な文化財である伝統工芸技術を将来に伝承するために、荒川区伝統工芸技術保存会とともに、次年度40回目を迎える「あらかわの伝統技術展」、小学校に職人を派遣する「あらかわ学校職人教室」、伝統工芸技術の継承者を育成する「荒川の匠育成事業」、そして昨年度オープンした「あらかわ伝統工芸ギャラリー」の運営を協働で行っています。今や荒川区は、伝統工芸の町、匠の町として知られるところとなり、伝統工芸技術は、区の観光資源にもなっています。

ようこそ匠の町へ 平成30年度の荒川ふるさと文化館企画展は、開館20周年を記念し、博物館事業、文化財保護事業を融合させた展示「ようこそ匠の町あらかわへ（あらかわと職人の歴史世界 part 2）」（会期：平成30年11月3日（祝）～12月2日（土））を開催します。「匠の町」として変貌、成長を遂げるに至った歴史を、近世・近代の古文書、絵巻、浮世絵等の絵画資料、古写真、伝統工芸品等により紹ぎ明らかになります。会期中、荒川区文化財保護審議会委員を講師に招き、記念講演会、ミニシンポジウム、展示解説を開催します。乞うご期待。

（野尻かおる）

荒川ふるさと文化館企画展開催！

の室から
展示窓か
No.②

胡粉用の石臼



写真1 常設展示室の石臼

常設展示室にて
「この石臼、どうやつ
て使うのだろう?」そ
んな疑問が浮かんだ
のは、夏休み子ども博
物館の案を練つてい
る時であった。「ゴロ
ゴロ回して粉にする」

とお答えになつた方、その通り。そもそも石臼は穀物の脱穀・精白・製粉などに使う石製の道具である。臼の上石の穴から材料を入れ、上石を回転させ、下石と磨りあわせれば、噛み合わせ部分から材料が粉になつて出る構造だ。しかしこれは、南千住八丁目（汐入）で使われていた胡粉（土中に堆積していた牡蠣殻を粉にした白色顔料）用の花崗岩製の石臼だ。「穴に固い牡蠣殻は通るの?」と考えると、いささか疑問が残る。さらに裏面がどんな模様かは上石が重くて簡単には確認できない。これだけ重量のある石臼を使って胡粉をつくるには何か方法があるに違ひない。

石臼のサイズ 現在も使われている蕎麦・抹茶等を挽く、一般的な穀物を磨りつぶす石臼は大きくとも 30 cm ほどである。一方、展示室の石臼（写真1）は直径 57 cm（上石・下石）と軽く倍の大きさがある。このほか胡粉用と思

われる石臼があるが、いずれも直径 61 cm（上石）、57 cm（下石）、54 cm（下石）である。なお、南汐入の胡録神社境内にも直径 57 cm（上石・下石）の石臼（写真2）が鎮座している。

石臼の目 展示室の臼のすりあわせ面に刻まれた目（模様）は簡単に見ることができないが、

胡録神社の石臼で、放射状（写真2）となつている目を確認することができる。これは、定規で引いたような直線ではなく、フリーハンドの花弁のような模様である。

これは一般的な臼とは大きく異なる。一般的な穀物を碎く臼の目は、独特な幾何学模様が彫られている（図1）。図1では溝を8分画に刻んでいるが、6分画に溝をほる地域もある。

胡粉のつくりかた 都立竹台高校の調査報告書『汐入の今昔』（昭和55年）によれば、胡粉製造の作業で使われた臼には、『搗き臼』と『挽き臼』の2種類があった。『搗き臼』は、杵を使つて牡蠣殻を荒く砕くための餅つきで使うような臼で、『挽き臼』は牡蠣殻に水を含ませ細かくするための臼だという。この『挽き臼』の外に木枠を組み、水と牡蠣殻の粉でできた濁り水を沈殿させ上澄みを捨て濃縮させた後、板の上でまるめて乾燥させてきめ細かい胡粉をつくる。汐入の高田家の「胡粉袋版木」（荒川区登録有形民俗文化財）の文字に「水干」とあるのは、まさに石臼による湿式粉碎の工程を示している。



写真2 胡録神社の石臼（右が上臼、左が下臼）

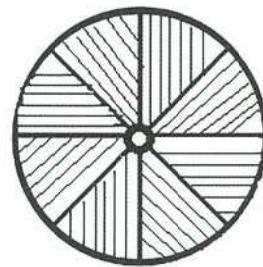


図1

また石臼を回すための引手（ハンドル）についても謎が残されている。引手には、横打込みとタガ締めがあるが、胡粉の臼には、引手を差し込む穴が開いていない。おそらくタガ締め引手だったのではないかと考えられる。

石臼にも用途と地域によって様々なカタチが存在する。汐入で使われた石臼についても、引手（ハンドル）の形や、何人で回すのかなど使い方を含め、まだまだ謎が多い。胡粉の臼は、胡録神社をはじめ汐入のマンション前オブジェなどでも確認できる。石臼の実物を前に、汐入で胡粉作りが盛んだった頃に想いをはせてみてはどうだろうか。

（高柳吟音）



写真1 運ばれる政宗像 伊藤鋳造所
を出てすぐ。
左に見えるのは常磐線の土手（しばた
の郷土館提供）

二十六馬力のトラクターに乗せるのに日暮里の伊藤鑄造所でまる一日かかった（中略）闇の夜に出発だ、道灌山のネオンの見える大通で「あつしまった！」獨眼あたりが省線の高いガードに突き当つてしまつたのだ（以下略）』（『東京朝日新聞』1935年5月13日号）。仙台の青葉城址（宮城県）に建つ伊達政宗騎馬像（以下、政宗像）は、日暮里で作られていたのです（傍線）。像の高さは4m18cmあり（写真1）、山手線の道灌山ガード（西日暮里三丁目）につかえ

職 こぼれ話 15 人

伊達政宗は江戸っ子だった!?
—日暮里生まれの銅像—

運ばれた伊達政宗騎馬像
昭和10年（一九三五）

てしまったようです。何とか政宗像はガードを潜り抜け、5日かけて無事青葉城へたどり着きました。

日暮里の伊藤鋳造所 「日暮里の伊藤鋳造所」は、昭和6年に伊藤和助が現在の西日暮里六丁目に開業した美術鋳造の鋳物工場です。昭和11年の『東京市工場要覧』の住所は、日暮里村970（旧日暮里町八丁目52番近辺か）。伊藤鋳造所について詳細は不明ながら、現在、皇居のほとりに建つ和氣清麻呂像（昭和15年建立）は、日暮里界隈の鋳物の職人が集まつて製作し、工場が大きい伊藤鋳造所で鋳造したものだ、というお話を日暮里で代々鋳造所を営む職人さんやそのご家族から教えていただきました。

原型作者小室達は宮城県柴田町出身の小室達です。東京美術学校で朝倉文夫に師事し、帝展などで大正・昭和時代に活躍した彫刻家です。政宗像は、「伊達政宗公三百年祭」を祝して制作されました。小室は全ての仕事を断り心血を注いだそうです。また、伊藤と小室は、以前から一緒に仕事をしていた縁から伴に政宗像を手がけたといいま

す。小室の日記には、铸造の時の様子（写真2）や伊藤の自宅に泊まり汽車の振動で眠れなかつたなどが記されています。小室の息子の名は、伊藤と小室で名づけたというエピソードからも2人の密な絆が感じられます。

その後の話 実は、現在仙台青葉城に建つのは三代目の政宗像です。初代の像は、第二次世界大戦中の金属供出によつて昭和19年に失われています。戦後、胸から上の部分が見つけ出され、

今は仙台市博物館の庭で古の姿を見ることがで
きます。



写真2 伊藤鑄造所内 初代伊達政宗像の
鋳込み。左から2番目が伊藤和助（しばた
の郷土館提供）

建物疎開で強制撤去された可能性があります。主要工場や主要駅などの付近が防火地区とされ、工場があつたと推定できる冠新道の南側、西日暮里六丁目の常磐線沿線も昭和19年に該当しています（『荒川区史』下）。この辺り、昭和20年4月13日の空襲で焼けていますが、それ以前に工場や家を失っていたのかもしれません。

時を経て昭和39年、同じ原型を使い、三代目の像の制作が葛飾区の铸造所で行われました。伊藤はこのプロジェクトにも携わっており、歳月が経つても忘ることのない、並々ならぬ想いがこの像にあつたことは想像に難くないでしよう。

建物疎開で強制撤去された可能性があります。主要工場や主要駅などの付近が防火地区とされ、工場があつたと推定できる冠新道の南側、西日暮里六丁目の常磐線沿線も昭和19年に該当しています（『荒川区史』下）。この辺り、昭和20年4月13日の空襲で焼けていますが、それ以前に工場や家を失っていたのかもしれません。時を経て昭和39年、同じ原型を使い、三代目

の像の制作が葛飾区の鋳造所で行われました。伊藤はこのプロジェクトにも携わっており、歳月が経つても忘ることのない、並々ならぬ想いがこの像にあつたことは想像に難くないで

*

*

*

資料提供並びにご教示いただきました、しばたの郷土館小玉敏氏、情報提供していただきました小室穰嗣氏、高橋節子氏、松本壽美子氏、菓子満氏に御礼申し上げます。〈八代和香子〉



写真1 寄贈された焼き型の一部

収蔵庫のイッピン！ 菓子店と職人との絆のあかし 人形焼屋さんの焼き型

八品目

みなさん、お菓子は好きですか？ 今回は寄贈を受けた資料から菓子の焼き型と、菓子職人歴60年以上の寄贈者から伺った、職人世界をご紹介します。

人形焼とせんべいの焼き型 今回寄贈された菓子の焼き型は、全8種類14点（写真1）。昭和50年（一九七五）から平成30年まで、旧三河島にある「荒川なかまち通り商店街（荒川三丁目）」で人形焼と、小麦粉や砂糖を原料としたせんべいの製造・販売していた重盛永信堂三河島支店から寄贈されました。焼き型は一番大きなもので42cm×11cm、重さはせんべい用が4kg、他は1kg程度です。

これらの焼き型からは、薄い生地の際までぎっしりとあんこが入った七福神の人形焼（写

真2）、甘い白餡がおなかにたくさん詰まつた鮎焼、縁起の良い形や焼印で柄をつけた、ぱりっと歯応えの良い8種類のせんべいが作られてきました。せんべい型には枠のあるもの、模様が入っているもの、平たい鉄板のもの等があり、菓子に合わせて焼き型を替え職人である寄贈者が一つ一つ形成していました。

日本における小麦と砂糖を使つた焼き菓子の原型は、室町時代にポルトガルなどから伝わった「南蛮菓子」だと言われています。中でも人形焼などは「型焼き物」と呼ばれており、江戸時代から人気のある今川焼や、明治時代に登場した、鯛焼き等は、その仲間です。

さて、寄贈された焼き型は、どのように活躍してきたのか。それをるために、寄贈者の菓子職人の人生を紐解いてみましょう。

焼き型と菓子職人のステップアップ 寄贈者の店の本店は、大正6年（一九一七）より日本橋人形町に店を構える株式会社重盛永信堂です。長野県に生まれた寄贈者（以下、職人）は、中学校を卒業した昭和30年（一九五五）におじが起した永信堂本店に就職し、菓子職人として修業を始めました。

永信堂の職人たちとは7年間の修業を経て一人前となり、本店から表彰状と二種類のせんべい型が贈られました。一人前の職人は、せんべいは3本1組、人形焼・鮎焼は4本1組で焼き型を使い、焼き具合を身体で加減する技術を体得していました。

さて、一人前になつた職人、お次はのれん分け、つまりは独立の準備開始です！ 方々で店舗に

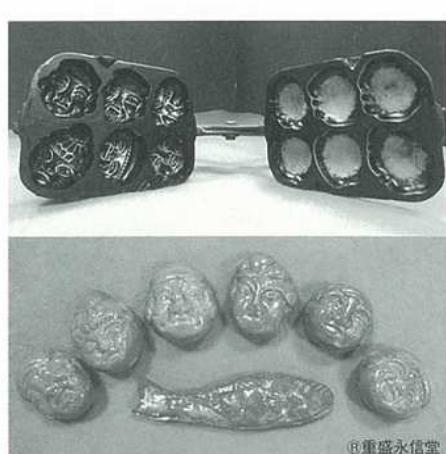


写真2 人形焼き型の内部(上)と寄贈者作成の人形焼と鮎焼の食品サンプル(下)

（岡田伊代）

そうして作られ続けた菓子は、商店街を行き交う人々により、季節の贈答に、友人宅を訪問する際のお土産に、おうちでのちょっぴりゼイタクなおやつにと購入され、43年もの間、あらかわの人びとの生活を彩り続けてきました。

あらかわ
夕イムトンネルズ 27

前田家墓地と日暮里

西日暮里公園 西日暮里三丁目の中台にある西日暮里公園は、昭和48年（一九七三）まで、前田家墓地だった。元々、青雲寺の境内地であったが、明治7年（一八七四）に前田家に売却された。船繫松や滝沢馬琴の筆塚があつた場所である。昭和48年の墓地移転時には、鳥居5基、墓跡6基、灯籠4基、水飲場一ヶ所があつた（『荒川区街づくり記念誌』）。

明治の前田家の墓所 鳥居があつたのは前田家

『加賀藩史料 編外備考』（清文堂出版、1980年）より作成

墓地が神式の墓地だったからである。江戸時代、多くの大名は、国許と江戸に墓地を持つていた。近代以降も華族として東京に居住することになり、引き続き東京にも墓地をもつた。ただ明治初年の新たな事情として、神葬祭用の墓地が必要となつた。明治期、日暮里には前田家関係者が複数埋葬されている（表1）。明治の前田家にとって、日暮里は、本郷（文京区）の本邸と根岸（台東区）の別邸の中間地点に位置した。日暮里の墓所はこうした事情から選定されたのかもしれない。

葬送の舞台としての日暮里 さて、実際の葬儀では、本邸もしくは別邸から日暮里の墓地まで、葬送行列が見られた。明治17年の斎泰の葬儀の際は、喪主を利嗣及び元支藩の当主である前田利閏（旧大聖寺藩）・同利同（旧富山藩）が勤め、有栖川宮威仁親王を始め、政府の参議・元老院議官、そして徳川昭武・伊達宗城・久松勝成ら華族、凡そ一五六〇名が会葬者として参加した（代人含む）。また、金沢から上京した旧藩士数百名も加わっている（『読売新聞』明治17年1月29日号）。

明治7年の前田慶寧の葬列を描いた多色摺りの摺物によると（図1）、警部・巡回・楽隊（ラツバ・太鼓・笛）—先立—指出—真榊—白紅旗—神饌（輿）—祭官—吳床両皮—祭官—馬車—法官—銘旗—家從—樂人（太鼓・笙・笛）—根越榊—鉢—造花—御柩—從者—吳床両皮—喪主—家從—名代—前田家関係者—家令—侍女—会葬諸員—警部が、徒步・馬車・馬・人力車など付き従つてゐる。144名が描かれており、実に長



図1 「前田斎泰公送葬御行列略図」(金沢市立玉川図書館蔵)

大な行列であつた。末尾には、「此外官員初、諸生徒参詣人数を知らず」とあり、見物人を合わせれば、もっと多く集まつたらしい。

日暮里村と前田家墓地 日暮里の墓地では、葬儀・埋葬だけでなく、年忌の祭典も行われた。「前田家で法事があるときは、村人の奉仕で道を整備し、道が悪いので砂利を敷いたり、むしろ敷いた。そのお札に前田家は、沿道の一軒ずつの人数を調べ、まんじゅうなどを配つてくれたものだ」という（平塚春造『日暮しの岡』、谷根千工房、一九九〇年）。

また、明治33年の利嗣の葬儀にあたつて、前田家は日暮里村に對し、慈善事業対策費として三〇〇円を寄附している（『東京朝日新聞』明治33年6月26日号）。単に墓地があるにとどまらず、前田家と日暮里村及び住人の間には、新たな関係が生まれていた。（亀川泰照）

文化財 NEWS 速報

養福寺仁王門の修理完了！

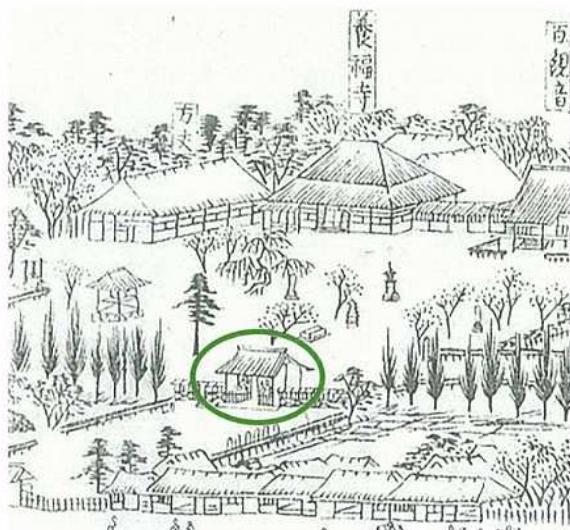


写真1 「江戸名所図会」に見える養福寺仁王門（○印の部分）



写真2 門の屋根裏に打ち付けられた棟札

養福寺の仁王門　日暮里の諏訪台通り沿いにあ
る養福寺（西日暮里三丁目）には、鮮やかな朱
色が印象的な仁王門（区指定有形文化財）があ
ります。

この門は、正面に安置されている仁王像が作
られた宝永年間頃（一七〇四～一〇）には建立
されていたとされ、「江戸名所図会」の「日暮
里惣圖」（部分〈館藏〉）にもその姿が描かれて
います（写真1）。

昭和20年（一九四五）の東京大空襲では養福
寺も被害を受けたそうですが、幸運にも仁王門
は戦火から免れました。

寺も被害を受けたそうですが、幸運にも仁王門
は戦火から免れました。

仁王門の修理

江戸の風格が今に残る門です
が、長年風雨にさらされるなかで、屋根の部材
や瓦に傷みが生じ、門表面の塗装も劣化して剥
離が各所に見られるようになりました。そこで
養福寺は荒川区の補助を受け、平成27年度より
4年計画で大規模な修理を開始しました（『荒
川ふるさと文化館だより』35号）。

まず前半の平成27～28年度で屋根の修理を行
い、傷んだ屋根板の部材や瓦の交換を行いました。
修理にあたっては、元来の門の意匠を保持
するため、江戸時代の記録なども参考にしなが
ら、交換する部材や瓦を忠実に再現しました。

後半の同29年～30年度では門の外装の塗り替
え工事を行いました。剥離してボロボロになつ
た塗装を一度剥がして、下地処理をした後、白
い内壁は漆喰で仕上げ、赤い門柱はベンガラの
塗料で上塗りを行いました。

修理の歴史　今回の修理に際して、新たな発見
もありました。門の屋根裏に打ち付けられた棟札
が見つかったのです（写真2）。棟札には工
事の年月日や関係者の名前が記されており、過
去の修理工事の履歴をることができます。こ
れにより文化財指定後の昭和59年（一九八四
年）の修理以外に明治8年（一八七五）、同36年
（一九〇三）、大正11年（一九二二）、昭和34年
（一九五九）、にも修理が行われたことが判明し
ました。こうした修理を繰り返し、仁王門は今
日に伝わってきたのです。

この度、美しい外観がよみがえった仁王門（写
真3）。是非、現地でご覧ください！（澤田善明）



写真3 全ての修理が完了した養福寺仁王門

● 荒川区登録無形文化財（工芸技術・額縁）保持者、吉
井菊雄氏（享年88歳）は、去る平成30年10月3日に
逝去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。